

二〇二六年度 一般入学試験 A日程 方式2

国語（現代の国語、言語文化〈近代以降の文章・古典（漢文）〉）

問題

志望学科	受験番号	氏名
文学部 中国語 中国文学科		

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明治以前、日本にあった詩の形は大ざっぱに言って、和歌、俳諧（連句、俳句、川柳）、漢詩の三つでした。それぞれに伝統的な約束事で形や作り方が決まっている定型詩です。

明治維新のあと、新しい時代の現実やそこで暮らす人々の気持ちを表現するには、そうした旧来の形式では窮屈になり、新体詩と呼ばれるものが生まれました。

しかし新体詩も、基本的には文語定型詩でした。つまり、人々が日常で使う口語ではなく、昔からの詩歌の伝統の中で使われてきたことばである文語を使う。そして詩の形も定型、つまり一行の字数、一つの連の行数を定めて、それに合わせて詩を作って行く。

「小諸なる古城のほとり／雲白く遊子悲しむ／緑なす藜藿は萌えず／若草も藉くによしなし／しろがねの衾の岡辺／日に溶けて淡雪流る」

文語定型詩の傑作の一つ、島崎藤村の「千曲川旅情の歌」の第一連ですが、見ての通り、各行が五音十七音、一連が六行で構成されています。そして、これと同じ構成の連が更に二回くりかえされて、全体三連で一つの詩が成り立つという仕組みになっています。

この詩は、意味内容から言えば、旅に出た青年のロマンティックな憂鬱をうたった、言ってみればたわいない詩ですが、日本語のゆるやかな音が流れるように重ねられて行くことによつて、読む人を酔わせます。これも確かに、和歌や俳句や漢詩では充分に表現できない、明治という新時代の青年の憂鬱だったのでしょう。

各行が五音と七音という和歌や俳句にも使われる音数、言ってみれば、日本語でいちばん無理なく響く音数で構成されているのも、それに一役買っています。

（ついでに言えば、五音と七音は日本語にとって基本的な音数で、日本語詩では、それに寄り添うにせよ外すにせよ、五音と七音を無視することはできません。）

しかし、やがて明治末期、新体詩も時代の青年たちから古臭いものと思われるようになりました。

①文語と定型に縛られては、自分たちの現実、内面を十全に表現できない。

そう人々が感じ始めたとき、口語自由詩が生まれました。

では、なぜ、明治末期の青年たちは文語定型の新体詩では満足できなくなったのか。明治の初期の青年たちは、それこそ自分たちの時代の新しい詩だと信じたのに。

そして明治末期の青年たちはなぜ、口語自由詩に自分たちのための新しい可能性を見たのか。

その理由をごく乱暴に言ってしまうえば、明治末、日本国家が欧米列強による植民地化の危機をやっと乗り切って、国家として、ほっと一息つけるようになったからです。

江戸時代の末期、徳川幕府治下の日本は、大きな危険にさらされていました。

西暦で言えば十九世紀の初期から中頃になりますが、工業化によって国力を増した英仏露などヨーロッパ諸国やアメリカが、いっせいにアジアへ進出し始め、アジアの各地は次々に植民地、半植民地になる。そして鎖国を国の方針としていた日本の近辺にも、それらの国々の艦船、いわゆる黒船が、交易を求めると称して、ひんばんに姿を現すようになりました。

日本は近代工業を持たず、軍事力においては圧倒的に劣勢でした。この危機を日本はどうやって乗り切り、どうやって独立を保ちつづけるか。明治維新は、そうした植民地化の危機を乗り切るための国家再編でした。

古い江戸幕府を倒す。そして新しい近代的国家を作り、工業化を進め、強い軍隊を備え、欧米列強の侵略を許さない――。

それは簡単なことではありませんでしたが、さまざまな幸運にも助けられ、明治の日本はともかくそれをなし遂げる。

そして、明治三十七、八年の日露戦争の勝利。それはほとんど勝利とも言えない、ほんとうに辛うじての勝利でしたが、ともあれ強大な帝政ロシアの圧力を日本の近辺から押し返したことで、日本はようやく国家滅亡の悪夢から逃れて、ほっと一息つくことができました。そして人々にも、自分自身の内面について考える余裕が生まれたのです。

明治維新以来、富国強兵の一路をひたすら走ってきた日本。それは避けられない道ではあったけれども、しかしその過程で多くの無理をし、多くのものを犠牲にもしてきた。

たとえば A という欺瞞ぎまん的な言葉。西洋の技術は取り入れるが、魂は日本古来のままであれ！

だが、富国強兵のために技術や社会制度の近代化を進めれば、そこに生きる人間の思考や感性だけが、江戸時代のままといい訳には行かない。しかしまた、だからと言って、日本の文化と歴史を背負って生まれ育った人間が、魂まで西洋のコピーになることなど、できるはずもない。

急速に、かつ無理やりに近代化を進める明治の日本の中で生きるということ――。

②それは、個々の人間にとって、彼の心にとって、いったい何を意味するのか。

そこで生きている人々は、いや自分は、いったい何を思い、何を感じているのか。何に苦しみ、何を喜んで、日々を生きているのか。

明治末期、国家としての日本の地位が一応安定し、にわかにならした疑問、いわば今まで棚上げにしてきた内的な疑問が人々の心を捉えたと
き、そこに生まれたのが口語自由詩でした。

古来より文芸の中で使われつづけてきた文語は、それで書かれる新しい文語詩を古く豊かな文化伝統につなげる。それに対し日常の生活の中で使われている口語は、それで書かれる口語詩の中へ個々人の日々の暮らしの喜怒哀楽や、今日から明日へ向かう人間の思考の、生き生きとした姿を持ち込む。

詩の中の定型は、人々の感性や思惟を規範と形式によって制限し、集中し、高める。それに対し定型を知らぬ自由詩は、喜怒哀楽や思考の流れ、動きを柔軟かつ生き生きと、ことばにして行く。

文語定型詩と口語自由詩の、どちらかが優れ、どちらかが劣っている訳ではありません。それぞれに長所があり、不得手な部分もあります。日本語の詩語（詩に使われることば）は長い文語の歴史の中で形成されてきましたから、③口語自由詩がそれを捨てたことは、大きな冒険であり、また損失でもあったと言えます。

しかし明治末期、日本の社会が一つの段階を終え、人々の関心が国家という大きな仕組みから個々内心の問題へと向かった時期にあつては、過去につながる文語定型詩よりも、人々の日々の感情と思考を生き生きと表現できる口語自由詩が選ばれなければならなかった。それによって詩は、詩人にとっても読者にとっても、自分の現在につながるもので、ありつづけたのです。

初期の口語自由詩の代表作の一つは、高村光太郎「雨にうたえるカテドラル」です。

自分の存在の核となるべきものを探し求める詩中の若者の「わたくし」――。

それは国家の運命とは別に、自己固有の基盤を求めている点で、個人としての「わたくし」ですが、しかしそれは、社会とは無関係に自分の関心事だけを追う、孤立し、閉じこもった「わたくし」ではありません。それは、日本と西欧との対比の中に、これからの日本文化の担い手となるべき自分の在りようを発見しようとする「わたくし」、その意味で公的おおやけな「わたくし」であって、そこに明治末から大正期にかけての、人々の心の形が見えてきます。

口語自由詩だからこそ書けた。そういう詩を読んでもみます。

やはり高村光太郎の詩です。

人に 高村光太郎

遊びぢやない

暇つぶしぢやない

あなたが私に会ひに来る

——画もかかず、本も読まず、仕事もせず——

そして二日でも、三日でも

笑ひ、戯れ、飛びはね、又抱き

さんざ時間をちぢめ

数日を一瞬に果すはた

ああ、けれども

それは遊びぢやない

暇つぶしぢやない

充ちあふれた我等の余儀ない命である

生である

力である

浪費に過ぎ過多に走るものの様に見える

八月の自然の豊富さを

あの山の奥に花さき朽ちる草草や

声を発する日の光や

無限に動く雲のむれや

ありあまる雷霆らいていや

雨や水や

緑や赤や青や黄や

世界にふき出る勢力を

無駄づかひと何どうして言へよう

あなたは私に躍り

私はあなたにうたひ

刻刻の生を一ぱいに歩むのだ

本を抛なげつ刹那せつなの私と

本を開く刹那の私と

私の量は同じだ

空疎な精励と

空疎な遊惰とを

私に関して聯想してはいけない

愛する心のはちきれた時

あなたは私に会ひに来る

すべてを棄て、すべてをのり超え

すべてをふみにじり

又嬉嬉として

恋と言っても、愛と言っても、また性愛と言ってもなおまだ不足な、男と女の生命の焰ほのおの燃焼です。まず最初の（a）行で一氣に二人のいのちの燃焼が吐露され、続いての（b）行、八月の自然から噴出する生命の力が讃たたえられ、終わりの（c）行でまた、二人の中で躍動する生命の激しい力が、率直剛毅な詩のことばとなって躍ります。自然の生命の力も、男女の生命の力も、同じ一つの生命の力なのです。詩の勢いに負けないよう、しっかりと腰を入れて読んで下さい。

「本を抛つ刹那の私と／本を開く刹那の私と／私の量は同じだ」

本を投げ捨てて女を抱きしめる自分と、本を開き、食い入るように読み学ぶ自分。そのどちらの自分も、同じように、生命に燃え立っているのだ――。

④この生命の噴出は、文語定型詩では決して表現できません。口語自由詩だからこそ表現となり得た、いのちの讃歌です。

この詩は個人的私的な恋愛詩ではありません。社会に向かって、宇宙に向かって、自分の恋の在りよう、生の在りよう、生命の在りようを宣言しています。

その意味で、この詩の「私」も、「雨にうたるカテドラル」の「わたくし」と同じように、決して自分だけ、あるいは自分たちだけの「私」ではなく、公的な「私わたくし」なのです。

大正期、日本も若々しかつたのだなあ、と平成の世を生きる私は、この詩を読んで改めて思います。そのとき「私」は、自分が閉じこもるための場所ではなく、外へ向かつて出ていくための、出発の場所、根拠地だったのです。

もちろんいまの時代でも、すべての人が閉じこもる訳ではないでしょう。ある年の授業の時、夏休みのレポートの自由課題の対象にこの詩を選び、「いまの自分のために書かれた詩のような気がする」と書いた人がいました。

先はどうなるうとも、一度はそう思えた――。その仕合わせは一生のものだろうと、レポートを読んだ私は思いました。詩は美しいものを美しくうたう。それが詩の使命だ――。

世の中では、そう考えられることが多く、また実際、詩は昔からさまざまな美しさをことばに書き留めて、人の世を豊かにしてきました。いま読んだ高村光太郎の詩もまた、いわば新しい美の領域の発見、征服でした。

しかし、世界に存在するのは美しいもの、肯定的なものばかりではありません。世界は醜いものにも満ち溢あふれていますし、また人の心は時として、否定的な感情にささくれ立ちます。

そして詩は、そうしたものが存在する以上、それらをもまた、表現せずにはいられない。

それが、世界と向かい合う詩の、本能的欲求です。

醜いもの、否定的なものの表現――。それも、口語自由詩が獲得した新しい表現の領域でした。

家庭 萩原朔太郎

古き家の中に坐すわりて

互たに黙もくしつつ語り合へり。

仇敵かたきに非ず

債鬼さいきに非ず

「見よ！われは汝なんじの妻

死ぬるとも尚^{なほ}離れざるべし。」

眼は意地悪^あしく 復讐^{かくしゅう}に燃え 憎々しげに刺し貫ぬく。

古き家の中に坐りて

脱^{のが}るべき術^{すべ}もあらしかし

萩原朔太郎は大正期から昭和の初期、伝統的美意識に訣^{げつ}別し、前例のない詩語を獲得して、切り裂くような感性の鋭さから暗く鬱屈する自我の闇まで詩に刻み込んで、一つの時代を作った詩人です。

この詩は読めば判る通り、自由詩ではあるけれども、口語ではなく文語で書かれていて、これを口語自由詩の例として出すのはおかしいと思われるかも知れません。しかし、ここでの文語的表現は伝統的詩語とつながるものではなく、一度、口語自由詩を経た上で、口語的日常性を超えた非日常性へ突入するために選り取られた語法です。

突き詰められた家庭の不和。もう行き先はなく、ただ黙ったまま、憎しみ合ったまま、何時間でも向かい合い、坐りつづけているしかない状態。

それを表現するためには、日常的な口語では足りない。⑤ 非日常的な文語で初めて表現される憎しみの極限。

夫婦だからこそ、男と女だからこそ、逃れようもなく落ち込む感情の地獄。

こうした否定的感情の極致もまた、口語自由詩を経て初めて表現可能となった、詩の領域の一つなのです。

(五行目六行目は、現実に発されたことばではなく、黙り込んだ妻の表情、妻の目から、詩人が読み取り、想像した、彼女の内心の憎しみのことばです。)

その後の口語自由詩が辿^{たど}った歴史を述べるには、紙数も足りませんし、何よりも私にその能力がありません。特に一九四五年の敗戦以降の詩の中で、際立って現代的ないしは前衛的な詩、いわゆる戦後現代詩は、その代表作といわれるものも、しばしば私の理解能力を大きく超えるので、この本の範囲の外だと思って下さい。

その上で言えば、現在書かれている詩も、ほとんどみな口語自由詩です。文語と定型を捨て、現実についての自在な表現能力を獲得した口語自由詩の可能性は、この先もまだ当分は尽きないだろうと、私は思っています。

B

現在の口語自由詩の中でも、そして、その中でもっとも前衛的な詩にあっても、古来からのことばの美や力は、さまざまな形で、働きつづけています。

(柴田翔『詩へのみちしるべ』による)

問一 傍線部①について、ここで言う「現実、内面」とはどのようなものか。本文の内容を踏まえ、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ア 国家の発展を第一とする政治的な理想や道徳観
- イ 急速な近代化の中で生きる個人の思考や感情の実感
- ウ 和歌や漢詩の中で培われてきた伝統的な美意識
- エ 欧米文化にならう中で芽生えた個人主義的な価値観
- オ 欧米列強に対し軍事的に劣勢であったことによる危機感

問二

A に入る語として最も適切なものはどれか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 和魂洋才 イ 和洋折衷 ウ 東西融合 エ 温故知新 オ 中体西用

問三 傍線部②「それ」が指す内容として最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 欧米列強と対等な国家を築くという国家目標
- イ 文語定型詩という新しい文学形式
- ウ 強引な近代化の中で生きていくこと
- エ 富国強兵を国是とするような価値観
- オ 西洋文化を受け入れることへの期待と不安

問四 傍線部③について、「冒険」と「損失」とはそれぞれ何を指すか。本文の内容を踏まえ、四〇字程度で説明しなさい。

問五 本文中の空欄（ a ）・（ b ）・（ c ）に入る適切な数値を、漢字で書き入れなさい。

問六 傍線部④について、著者が文語定型詩では表現できないと考える理由は何か。本文の内容を踏まえ、五〇字程度で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「非日常的な文語で初めて表現される憎しみの極限。」から読み取れる筆者の詩をめぐる考えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 否定的感情の極地で獲得される美的境地もある。

イ 激しい感情は激しい言葉によってこそ表現できる。

ウ 強い感情はかえって抑制的に表現すべきである。

エ 否定的感情も表現形式を選ぶことで詩になり得る。

オ 詩は日常語から完全に離れて成立するものである。

問八 段落Bは、次の三つの文によって構成される。正しい順序に並べ、記号で答えなさい。

ア なぜなら、日本語そのものが、千年を越える表現の歴史の中から生まれてきたものだからです。

イ 詩は、伝統とのつながりを決して断ち切れない。

ウ ただ、口語自由詩も、実は伝統と完全に切り離れて存在している訳ではありません。

II

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお設問の関係から本文・書き下し文・現代日本語訳などを省略したり改めたりした部分がある。また訓点を（送り仮名・振り仮名等も含めて）省いた箇所がある。

孟子は孔子を尊崇し、孔子の思想の継承者たらんことを自負していた。孟子の主観的意図のいかんにかかわらず、『孟子』が尊重されるようになったのは、唐の韓愈・柳宗元によって顕彰されたのに始まる。宋代に入って朱子が四書のなかにとりあげることによって、経典としての地位を不動にし、儒教経典の重要な（経）としての役割を担うに至った。

一見したところ、孟子は楽天的なと言ってよいほどの理想主義者にみえる。その理想主義は政治思想のなかで最も端的にその面目を発揮する。

孟子は理想的な政治とはいかなるものであるとして問題を自己設定しているか。両者は不可分の関係をもつが故に、この問題は彼の説く「政治」の意味・あり方を明らかにすることによって鮮明になる。

「スル勞^{スル}心者治^{ハメ}人、スル勞^{スル}力者治^{ハメ}於人^ニ。治^{メラル}ニ於人^ニ者食^{ハヤシナヒ}レ人、治人者食^{ハヤシナヒ}於人^ニ。天下之通義也。」（とうぶんこう滕文公上）。このこ

とばに端的に示されるように、彼にとって、政治とは支配と被支配の關係の謂いに他ならない。孟子の政治理念では、統治する者と統治される者との關係が明確にされることが前提になる。そして、この關係の頂点に立つ者が「王」と規定される。この「王」を頂点とするピラミッド型の統治形態の序列化が「義」として把握され、定式化される。このような統治形態をまるごと抱えこむ思想を理念化して標語として表現したものが「王道」である。

「以^レ力^ヲ假^ル仁^ヲ者^ハ」^A、^B「必^ズ有^ニ大^ヲ國^一」。以^レ德^ヲ行^フ仁^ヲ者^ハ」^C、^D「不^レ待^タ大^ヲ、湯^ハ以^ニ七^ノ十^ノ里^一、文^ハ王^ハ以^ニ百^ノ里^一。以^レ力^ヲ服^ス人^ヲ者^ハ、非^ズ心^ニ服^ニ也、力^ハ不^レ贍^{タラ}也。以^レ德^ヲ服^ス人^ヲ者^ハ、中^ノ心^ニ悅^ユ而^モ誠^ニ服^ス也。如^キ三^ノ七^ノ十^ノ子^ノ之^ノ服^{スルガ}ニ^ニ孔^ニ子^一也。」(公孫丑上)と説かれるように王道は霸道に対立する概念である。孟子はこの「王道」の実現を窮極^{きうきよく}の理想とする。その王道実現の具体的手段を「仁政」という。そして、目的たる「王道」と手段たる「仁政」には連続した関係がなければならぬとする。この関係を真に担いうる者こそが「王」と呼ぶに値する。

孔子が周王朝成立の「本来的精神」を再現することを念願していたのに比し、孟子にとっては周王室の存否は問われない。恐らく、現実の世界で「利」を主軸にして展開される諸侯の政治的な行為と力関係の中で、孟子の意識に周王室の存在の影すら映ることが稀だったのであろう。だから、自らの理念たる「王道」を実現しさえするならば、前引の滕文公上のことばからも知られるように、「仁政」の担い手は誰でもよかったのである。敢えて言えば、孟子その人自身でもよかった。彼自身が王道実現の担い手たりうるか否かという問題設定を立てることによつて、「王道」の具体的内容が理念化される。だから、「如^キ三^ノ七^ノ十^ノ子^ノ之^ノ服^{スルガ}ニ^ニ孔^ニ子^一」個人的な繋^{つな}がり^ナが、支配者と被支配者との間にももちこまれて、その関係性を規定する原理とされる。その故に、〈政教一致〉という態様をとらざるをえない。そこでは、一人の支配者たる「王」と多数の支配される者との多様な対応関係は捨象されて、論理の単純化がおこなわれる。だから、本来、一対多あるいは多対多の関係である現実が、一対一という君臣関係の図式に一様化され、そこに〈擬制〉が成立する。しかし、この〈擬制〉をもつが故に、「君」の意味とその政治の内容とが規定しうる。と同時に、当時の社会の諸状況、とりわけ政治的状況をより鮮明にしうる機能としての役割を果たしうる。

「王道」を実現してゆく上での具体的方策たる「仁政」のなかみは何か。「仁政」を施されるべき対象たる「民」をどのような性格をもつものとして、孟子が認識していたかということと「仁政」のなかみとは密接な関係をもつ。すなわち、「民」の規定を通して「仁政」の内容が露わになる。

孟子は「民」をどのように規定しているか。「無^{クシテ}恒産^ニ而有^ル恒心^一者、惟士^ハ為^レ能^ク。若^{キハ}民^ハ則^チ無^ク恒産^一、因^{リテ}無^ク恒心^一。」(梁恵王上)存在者として定義される(この同じ定義は滕文公上にも、一、二の文字の異同はあるがみられる)。

つまり、よく指摘されるように、「民」は安定した経済生活の保証がなければ、「王道」実現のための参与者たりえないとする。だから、彼ら「民」を「王道」実現の建設者たらしむるために、「仁政」によって「使民養生喪死無憾」^③る

状態が保証されなければならない。孟子が総括的に説く語を用いうるならば、「民の産を制する」(梁恵王上)ことなのである。この施策を「王道の始」という。「民」の経済生活の基盤を確立することが「王」の第一次的任務であって、

この任務を怠る時、あるいは能力をもたない時、「何異於刺人而殺之、曰非我也、兵也。」(同上)と断罪されて、殺人

者と同一視され、「王」でなくなる。このように「王」と「民」との第一義的な関係は政治を媒介にして成立する。従

って、両者の関係は、「王」は「民の父母と為る」と図式化され、伝統的な家族共同体の原理が援用される。そして、この援用による図式化こそが、「王道」を〈擬制〉に墮せしめる枢機なのである。

(中略)

孟子の政治思想は「X主義」として民主主義に擬する態で称揚される。また、フランス革命時の啓蒙思想家達に影響を与えたとも言われる。「民^ヲ為^シレ^バ貴^シ、社稷^ヲ次^グレ^バ之^ヲ、君^ヲ為^スレ^バ輕^シ。」(尽心下)とは「X主義の基本的定理である。

と同時に、このことばは〈君權〉を相対化せしめる存在としての〈民〉の認知の意味をもつ。なぜこのように〈民〉を認知しえたのか。もちろん、「天視自^ニ我民視^一、天聰自^ニ我民聰^一。」と『尚書』太誓篇のことばを引用する（万章上）ように、伝統的な人民観の継承であろうし、また、「桀紂之失^ニ天下^一也、失^ニ其民也^一。失^ニ其民者、失^ニ其心也^一。」（離婁上）という歴史的な事実解釈にその根拠をえたものであろう。（中略）そして、孟子自身の思惟構造に連関してその根拠を求めれば、「性善説」に帰着せしめうる。

孟子は「性善説」を主張した。人間の性——もちまえを「善」と孟子は規定した。孟子が性を「善」とする根拠はなにか。「所^レ以^レ謂^ニ三人皆有^ニ不^レ忍^レ人之心^一者、今人乍^ニ見^ニ孺子將^ニ入^ニ於井^一、皆有^ニ怵惕惻隱之心^一。非^ニ四所^一以^ニ内^ニ交^ニ於孺子之父母^一也、非^ニ四所^一以^ニ要^ニ於郷党朋友^一也、非^ニ下惡^ニ其声^一而然^ニ上也^一。」（公孫丑上）と説かれる。人の素朴な内発的行為が性を「善」とする根拠になる。だから、「無^ニ惻隱之心^一非^ニ人也^一、無^ニ羞惡之心^一非^ニ人也^一、無^ニ辭讓之心^一非^ニ人也^一、無^ニ是非之心^一非^ニ人也^一。」（同上）として、人であれば誰しも「善」を固有すると考える。そして、「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。」（同上）と言って、仁義礼智のよって生ずる所を性の発露としての「心」に求める。さらに「人之有是四端也、猶其有四体也。」（同上）と善なる性を生得のものと結論づける。

孟子は比喩に優れた弁舌家と一般には認められる。ここでもその比喩が一見もつともらしい口吻をもつて語られる。生得の「心」があることと「四体が有る」こととは何ら関わりはない。その無関係を〈関係〉とみせかけることから、「仁人心也。義人路也。舍^ニ其路^一而弗^レ由、放^ニ其心^一而不知^レ求、哀哉。人有^ニ鶏犬放^一、則知^レ求^レ之、

有^{リテ}放^{ツコト}心而不^ラ知^{ムルヲ}求^{ムルヲ}。学問之道無^{ハシ}他、求^{ムル}ニ其放心^ヲ一而已矣。」（告子上）という比喩が生まれ、「無名の指」（同上）の比喩が語られる。かかる乱暴な比喩の使用は、四端説にその原因をもつ。本来、比喩そのものは、ことの因果関係を明確に説明しうるものではない。孟子にはそうしたことへの反省がない。だから一時的な反論形成、説得のために安易に比喩が用いられる。詭弁的でさえあると言える場合がある。そして、孟子が政治思想としてその〈擬制的〉秩序理念を組成した根幹を支えるものが、彼自身の意図の如何はどうあれ、この比喩の多用にあった。換言すれば、比喩の多用と〈擬制的〉秩序理念との間には函数関係が成立する。

（本田濟編『中国哲学を学ぶ人のために』による）

語注

◎韓愈・柳宗元Ⅱ中唐の儒者・文人。文は道を載せるための手段と主張して古文復興運動につとめた。◎湯Ⅱ殷王朝の創始者。暴虐な夏の桀王を倒して殷王朝を開いた。◎文王Ⅱ周の武王の父。殷の末期、諸侯から信望を得て西伯と称された。◎擬制Ⅱ実質の異なるものを同一のものとみなして扱うこと。◎恒産Ⅱ生業・収入、財産など生活手段。◎恒心Ⅱ一定不変の道徳心。◎社稷Ⅱ土地の神と五穀の神。転じて、国家。◎桀紂Ⅱ桀は夏王朝、紂は殷王朝の最後の王。ともに暴虐な人物であったとされる。◎孺子Ⅱ幼児。乳飲み子。◎怵惕惻隱Ⅱ他人のことであっても痛ましく感じる思いやりの気持ち。◎惡其声Ⅱ（見殺しにしたという）惡口をおそれる。

問一 傍線部①「治人者食於人」の訓読を原文に訓点（返り点、送り仮名）を振って示しなさい。

問二 空欄

A

B

C

D

 に入れるのに最も適切な組合せを次のア～エの中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- | | | | | | |
|---|---------|---|---|---|---|
| ア | 覇―覇―王―王 | A | B | C | D |
| イ | 覇―王―王―覇 | | | | |
| ウ | 王―覇―覇―王 | | | | |
| エ | 王―王―覇―覇 | | | | |

問三 傍線部②「以力服人者、非心服也、力不贍也。」を現代語訳しなさい。

問四 傍線部

a

く

e

 の読みを平仮名（現代仮名遣いも可）で記しなさい。

問五 傍線部③「使民養生喪死無憾」を「民をして生を養ひ死を喪^{きう}して憾^{うら}み無からしむ」と訓読できるように、訓点（返り点、送り仮名）を振りなさい。

問六 傍線部④「何異於刺人而殺之、曰非我也、兵也。」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- ア 人を刺すのと殺すのとどこが違うのか、非は自分にも武器にもあると言う。
- イ 人を刺し殺しておいて、自分ではない、武器が殺したのだと言うのとどこが違うのか。
- ウ 人を刺すのと殺すのではまったく異なるではないか、自分は悪くない、武器が悪いのだと言う。
- エ 人を刺すのと殺すのは何も変わらない、悪いのは自分であり、武器ではないと言う。

問七 空欄

X

に入れるのに最も適切な語句を次のア～エから一つ選び、その記号を記しなさい。

ア 三民

イ 民俗

ウ 民族

エ 民本

問八 傍線部⑤「失其民者、失其心也。」とはどういうことか、「其」の指すものを明らかにして簡潔に説明せよ。

問九 傍線部⑥「今人乍見孺子将入於井」の書き下し文（漢字・仮名交じり）を記しなさい。

問十 傍線部⑦「人之有是四端也、猶其有四体也。」を「人の是の四端有るや、猶ほ其の四体有るがごときなり」と書き下せるように訓点（返り点、送り仮名）を振りなさい。

問十一 傍線部⑧「学問之道無他、求其放心而已矣。」を「放心」の内容が分かるように現代語訳しなさい。

問十二 孟子の性善説に対し性悪説を唱えた思想家はだれか。次のア～エから一つ選び、その記号を記しなさい。

ア 孔子

イ 墨子

ウ 莊子

エ 荀子